「教育を語る」

講師　木田　宏　先生

プロフィール

木田　宏（きだ　ひろし）教育学博士
大正11年3月22日生　広島県出身

●略歴

昭和19年　京都帝国大学法学部卒業
昭和21年8月　文部省入省
昭和39年7月　日本ユネスコ国内委員会事務局次長
昭和40年7月　文部省大学学術局審議官
昭和41年7月　文部省社会教育局長
昭和44年1月　文部省体育局長
昭和46年6月　文部省大学学術局長
昭和49年6月　文部省学術国際局長
昭和51年6月　文部事務次官
昭和53年6月　文部事務次官　退官
昭和53年7月　国立教育研究所長
昭和60年3月　国立教育研究所長　退任
昭和60年4月　日本学術振興会理事長　今日に至る

●主な役職

日本教育情報学会会長
日本教育行政学会理事長
日本ユネスコ国内委員会委員

●主要著書

教育計画（訳）　昭和42年　第一法規
知識産業（共訳）　昭和44年　産業能率短期大学出版部
新訂　地方教育行政の組織及び運営に関する法律　昭和52年　第一法規
文教の課題に向けて　昭和53年　第一法規
戦後教育の展開と課題　昭和56年　教育開発研究所
教育行政（編著）　昭和57年　有信堂
新版　教育行政法　昭和58年　良書普及会
なお、（財）マツダ財団設立当初より理事を務めていただいております。

「教育を語る」

ただいまご紹介いただきました木田でございます。

ご紹介の中にもありましたように、私もこのマツダ財団創設の時からご相談にのっておりまして、こうした催しの、ある意味では主催者側の一員でもございます。よくいらっしゃいました、ありがとうございましたと、こう申し上げなければならないのでございます。

こういう催しをしたいというお話を聞きました時に、いや、それはお集まり下さる方々のことも考え、また財団のことも考えて、少ししっかりした講師をお招きしたほうがいいというので、財団のお力添えをいただいており、前の江田島の青年の家の所長をしていらした本家さんにいろいろとお力添えをいただいて、岡先生という今売れっ子の先生をお願いいたしました。私はその前座役を務めて、好きなように好きな時間だけしゃべれというふうに言われるものですから、気軽にお話をしようと思っております。

また、私の題もご案内のように何でも好きなようにしゃべっていいというテーマにしてありまして誠に申し訳ないんですけれども、気軽に一つお話をしてみたいと思います。

批判をあびる現在の教育制度

ところで今日、新聞を開きますと、ほとんど毎日のように、日本の教育はこれでどうなっているのだというような記事がいっぱい出てまいりまして、胸が痛む思いがするわけでございます。

臨時教育審議会も一年半ほど前から開かれておりまして、日本の教育を立て直さなければならんとこう言われ、第一次答申も出まして、それを見ても、あそこも悪い、ここも悪いというふうにいっぱい書いてあります。しかし、私は日本の教育の今日までの姿というのを外側から見ておりますと、みんなですばらしい教育を築いてきたという一面を否定することはできないと思うのでございます。

今年の春でございますが、ちょっと古い新聞になりますけれでも、七月二日の日本経済新聞に、アメリカの前の教育庁長官、日本で言う文部大臣、をこの前まで担当しておられましたベルさんという方が

みえまして、そして日本で日本経済新聞の主催で教育講演会をなさった。

その新聞にも書いてあるんですが、講演で、博士は日本の教育制度は世界的に見て最も優れておる。生徒も教師も、全体的にきわめて質が高い。それが新しい民主主義社会の原動力になっていると賞賛をしておられる。

私なども、教育研究所にいたからではないんですけれども、日本のいろんな教育のデータを比較してみますと、どうやっても日本の初等、中等教育というのはすばらしいという結果が数字の上では出てくるのでございます。

生徒と学校の先生の数、日本の先生方はまだ一クラス子供の数が多いと言われますけれども、学校の先生全体と生徒全体との数の比率でとってみますと、小学校も中学校も決して悪くないんです。日本よりもはるかに人口密度の少ないヨーロッパの国々と比べてみても、ちょうど同じくらいのいい線をいっております。

また、子供たち一人あたりの教育費の入れ方、これは税金だけではございません。皆様方がお子さん方に出していらっしゃるお金も全部計算に入れてのことではありますけれども、学校教育に掛かっております経費は、まず世界一と言って構わない。特に今、一ドル＝二〇〇円というような相場で計算をいたしますと、アメリカよりも子供一人あたりの教育費が高いというような状態でございます。海外にいらして、また海外に出入りして来られた皆様方であれば、日本の学校が施設も設備も大変よく整っておるということもおわかりでございましょう。

日本の教育の成果

また、よく勉強するんです。私も教育研究所におりまして、アジアの人たちを日本にも年に何回か呼んでまいりまして、一緒に教育のセミナーその他をいたしました。そして、学校も見せてあげます。

そうすると、そういうアジアの各国から来た人たちというのは、本当に日本の学校に行って見ると立派だ、子供たちは一生懸命勉強しているし、先生方は一生懸命よく教えているように思う。ほかのどこの国に行って見せてもらったときよりも、いい教育をみんながまじめにやっているように思う、と言われる。

そして、その教育のことを、今度は社会生活に引

き寄せて言うのでございます。日本の街は、夜遅くどんなところを外国人が一人で歩いていても怖いことはない。世界でこんな一番安全な国というのはありません。それは日本の教育の成果ではありませんか。

その証拠には、日本の産業もすばらしい発展をしておるではありませんか。マツダ株式会社もたくさんの自動車を輸出しておられる。今朝も社長さんのお話を聞いておりますと、マツダの自動車をつくるために大変数多くの人たちが、広島市民の五人に一人は何らかの意味で関係があるというほど、たくさんの人たちがマツダを支えていらっしゃる、ということです。

そのどこに強さがあるかというと、どの部品をつかまえてきても非常にクオリティが高い。ぱっと組み合わせると、それで大変質の高いものができる。町工場の端々でつくられている部品も決して品質の見劣りがしない。どうしてだ。それだけの能力のある人々が町工場を支えておられる。一分間よりもちょっと少ない五十四秒とか五十七秒とかに一台ずつ、マツダの車になってトット、トット、とできていくということなんですから、おそらくこれはすばらしくないというほうがおかしいんです。

ですから、私はそういうすばらしい仕事ができる国民がどこからできているんだと言えば、やっぱり日本の今までの教育の中から生まれてきておるではないか、こう、ほかの国の人が言い、また我々もそう言って構わないというふうに思うのでございます。ですから、確かにその意味では教育の成果が上がっています。

国際的データからみても高水準の日本

数学の国際比較を国立教育研究所におります時にいたしました。まだ二度目の結果を国際比較として発表できる段階になっていないのは大変残念なんですけれども、実は三年前に、各県の教育研究センターと一緒になって、数学の調査をやり、そして二年前に理科の調査をいたしました。国内の結果だけは、もうすでに出ました。理科の調査も出ました。

そして、約十年前に行われました第一回の国際調査と比べてみても、第二回の調査は決して学力の水準が低下したということになっていない。むしろ、中学校などは大幅に上がった。高等学校の数学の成績も上がった。そして、おそらくは今回の第二回も

十年前と同じように、日本の子供たちの数学の成績は世界で一番であるというふうに、私担当しておったんですから、大体発表前の概数はわかっておるんですが、言うことができるわけです。

ですから、その意味において、日本の学校の先生もよく教えて下さっておるし、それからまたお母さん方も子供さんの勉強のことを一生懸命になってやっておられる。

そして、国際的に比較を見ると、日本の子供たちはよくできる。よその国の人々から見ると、どうして日本がこんなにすばらしい教育ですばらしい成績を上げておるのに、どこがまずくて教育改革をしなきゃならんのですか。中南米から来た新聞記者の人たちも、ヨーロッパから来た人たちも同じことを言うんです。

アメリカの教育はどうか

アメリカから来た人たちはどう言うかというと、いや、我々はあまりにもみんなばらばらな教育をやっておる。自分はもう少しクッキングが習いたいと言えばそうする。理髪屋の勉強がしたいと言えばそうする。そして、好きなことだけやって高等学校の単位をとるなんてことをやっているから、高校生全体のレベルがだんだん下がってしまって、大学生の知識も下がってきておる。だから、何とかしてアメリカの教育をもう少し立ち直らせるというふうに努力をしなければいかん。もっと教育内容も、日本のように一斉に、ある同じことを教えて、同じ水準のものを維持できるようにするということができれば、どんなにかすばらしいだろう、こういう言い方をしてくるわけです。

新聞はどうみているか

つい最近も、東京と、それから広島だったですか、世界の人々が集まった教育研究集会がありまして、11月12日の朝日新聞に、「褒められる日本の教育」というテーマで、こういう論説を書いております。このセミナーは集まって来た人たちが、日本の教育はすばらしいと褒めたんです。

そこでこの論説は何と書いたかというと、よその国が見て、千葉、京都で開かれた教育改革の国際セミナーを取材に来た特派員が、日本の教育はすばらしい。しかし、簡単に輸入するのは難しいなというようなことを書いておる。そして、日本の学校教育は、子供たちに高い水準の学力を保証しつつ、規則、道徳を身に付けさせる人間教育にも成功しておる。米国人から見ると奇跡的であり、うらやましい限りだ。こういうふうに言っておる。しかし、だからといって、あんまり安心してはいかんなというのが、この論説の中身なんです。心配なことはいっぱいあるじゃないかというふうに書いてあるんです。

確かに、外の人から見て、そしてよその国の教育の現状と比較してみますと、日本の教育は悪くない。すばらしい。

学校で問題になっている事

しかし、国内の皆様方から見ておると、どうも学校はなっとらんではないか。あのいじめの状況はどういうことだ。臨時教育審議会が発足する前は、いじめの状況ではなくて、校内暴力だったんです。荒れる学校、荒れる中学校で、生徒が先生のお話なんか聞こうとしない。そういう学校がたくさんある。

事実、私が教育研究所におります時に、広島大学の大学院の学生さんを採用した。その人は、広島市内の中学校で大学院の学生をしながら先生をしていました。学校はどうだと聞いてみたんです。とにかく教室の中で生徒に話を聞かせるように、こっちに顔を向けさせるのに、一時間のうち半分ほどかかります、という答えです。それは先生が若いからということもあるんでしょう。中学校の子供らは腕白ですから、冷やかしたり、あれは若僧だというふうに思っているから余計いけないのかもしれませんが、自分の話を聞くようにさせるのに、授業時間の半分はエネルギーを取られます。とってもまともな教育という状態になりませんねというのが、その人の実感的な感想でございました。

普通の学校でそうなんでしょう。ですから、荒れる学校というのは、たくさんあちらこちらにもありまして、卒業式も満足に行えない。事実、二年半ほど前の五十八年二月に、子供たちが横浜で、夜な夜な浮浪者を追いかけて殺して遊んでおったという記事が出てきたんです。これは大変ショッキングなことでございまして、一体どうしてこういうことになっておるのかというふうに思ったら、今度は町田の中学校の先生が、生徒に脅かされるものですから恐ろしくて、生徒に対してナイフを持って切りつけたという記事が出まして、それからまた大変な騒ぎになりました。

文部省の対応

実は、その時までに荒れる学校というのがだんだん数が少なくなりつつあったんですけれども、五十八年二月に、二つ相次いでそういう大変ショッキングな新聞記事が出て、そこで一斉に、国民の皆さんから、今の学校は何をしておるのだという声がまた高くなる。政治家も放っておけないといういことになって、今のような臨時教育審議会で全部洗いざらい見直そうというような成り行きになってきたわけです。

実は、日本の国内で、日本の教育がこのままでは具合いが悪いぞということを言われ出したのは、もう十年前後も前からなのであります。文部省が気付いておったのは十四、五年も前からでございます。

文部省は、昭和四十二年になって、戦後の教育改革はいつまでもこのままでは具合いが悪いというので、広島にゆかりの森戸辰男先生に、中央教育審議会の会長をお願いしておった時でございますが、森戸先生にお願いをして、戦後の教育改革を全体として見直すという中央教育審議会の作業をしていただきました。

森戸先生の教育改革案

森戸先生は、広島大学の学長になる前、文部大臣をしておられまして、ちょうど六三制の実施の時に、また教育委員会制度実施の時の担当責任者でございました。

その戦時中のことですから、ご自分の思い通りに必ずしもならない。こういうことでは具合いが悪いと思って司令部に大臣として足を運ばれたけれども、自分の意見というものは占領軍に受け入れられなかった。その自分がし残した教育改革を、中央教育審議会の会長として何とかもう一度見直したいという強いお気持ちがありまして、森戸先生は昭和四十二年から四十六年まで四年間かけて、戦後の教育制度全体の見直しをおやりになった。そして四十六年に第三の教育改革という立派な答申を作って下さったわけです。

これからの日本、国際化していく日本、知識がどんどん進んでいかなければならない日本ということを考えたら、戦後の教育改革を越えて、次の第三の教育改革をしなければならん、こうお呼び掛けになった。

しかし、幸か不幸か、その時はもちろん日教組も反対、政界もあんまり立派なことを言ってもらっても、そう簡単には手がつかないというようなことでございまして、肝心の文部省自身が、あまり立派過ぎて、さてどうしていいかと言って尻ごみをしておったようなことがあるのでございます。

新しい方向へ

そこで、ある部分は使って、その後の施策に文部省も力を入れてきたんです。学校の先生の処遇を高めなければいけない。デモシカ先生じゃ困るんだというようなことが、その時に言われました。それで一生懸命学校の先生の処遇も良くする。資格も高めなければならない。皆がもっと勉強するようにしなければいけない。新しい大学院もつくらなければならないなどという指摘がありました。

そういうことの中から、元広島大学の学長をしていらした飯島さんが、長いことお骨折りになって、広島大学に総合科学部という新しい学部をつくられた。大阪大学に人間科学部ができた。その時から放送大学をつくろうという話がありまして、そして今年やっと放送大学もできるようになった。ですから、いくつかそういう新しい態勢は進んで行ったんです。

経済摩擦——日本の経済界からの声

しかし、その後どういうことになったかというと、経済界からまずこういう問題が起こってきたんです。

ちょうどマツダなどもオイルショックの痛みから立ち直りかけて、少しずつ前向きに仕事をしなくちゃならん、こういうことになってきた時に、あちこちで経済摩擦が起った。国際的に仕事を広げていかなくちゃならないのに、日本の若い社員というのがどうも国際社会でうまく溶け込まない。もう少し気持ちのいい仕事ができるようにしなくてはいけない。

そして、本当に世界の人々に日本の商品を日本のものとして愛してもらうとするならば、もっと日本人自身が自分でつくった創造的なものをどんどん生み出すようにしないといけません。よその国の人のつくったものを後から後追して、まねをして、上手につくって、そして少し品質がいいから、安くできるからということで相手の国の自動車産業を追っ払うというのでは問題です。

マツダも立派になりました。きょうも見せていた

だいたんですが、十数年前に比べてさらに一段と見違えるくらい大きくなった。それだけアメリカの自動車市場に日本車がどっと出ていくのですから、それは大変なことなんです。

日本の経済の将来を考えると

そこで、日本は人のまねをして、そして人のところに来て荒しに回る、けしからん、という文句が出てくる。こういう現象が、電気産業から、自動車産業から、その前は繊維産業からと、次々と重なってきたわけです。

ですから、日本の経済界の人たちは、日本の将来を考えたら、どうしてももう少し国際的に仕事のできるような人ができてきて、しかも、相手から嫌な奴だと思われないような、そういうやり方ができるようにならないと袋だたきに遭うのではないか。事実、今だんだん怪しくなってきて、袋だたきに遭いそうな状況になってきています。総理が一生懸命に旗を振るんですけれども、なかなか舵がとれない。

昭和五十年代の初めごろから財界の人たちが心配を始めまして、そして昭和五十四年からは東京と関西で期せずして、二十一世紀に向けて教育は基本的に考え直してくれ。今までのように同じようなタイプの人間教育ばかりやっていてもらっては困る。閉鎖社会は困る。もう少し海外に仕事に行って帰って来た子供たちが、日本に帰ったらいじめられないようにしてほしい。このような声がそのころから高まってきています。

家庭からの声

もう一つ高まってきた声は何か。これは家庭の中で子供さんが親の言うことを聞かなくなった。何を言っても反抗する。学校に行けと言っても学校に行きたくないと言う。学校がおもしろくないと言う。先生は何も教えてくれない。だから学校はもう行くのいやだという。あるいは、朝になるとおなかが痛いと言い出す。それを親との間でやりとりをやっておりますと、だんだん双方興奮してまいりまして、そして家庭内暴力というのが起こる。家庭もそれで困ってきたのです。

学校でもそのころから校内暴力が、にぎやかになりました。大学や高等学校が荒れたのは昭和四十四～四十五年のころでございます。それが収まったと思ったんですが、だんだん年齢が下がってまいりました。家庭の中で高校生が親を殴り殺す。立派な家庭の孫でありながら、立派なご家庭のおじい様を殴り殺すというような事件が相次いで起こりました。そして、親御さん方は本当に自分のうちで子供をどうしていいかわからないという事例があちこちで起こりました。

解決法をさぐって

それで戸塚ヨットスクールといった事件まで起こった。お金をつけて子供を無理やりにそこへ強制的に入れて、もうどんなことになってもいいからうちに帰してくれるなという親まで出てきた。

長野の篠ノ井旭という学校がありまして、これは私立の高校なんですけれども、若林さんという教育に熱心な校長さんが、困った子供さん方でも、一つ私のところでできるだけ一生懸命社会復帰を考えて、高校を卒業させましょうと努力された。全国から、そういう学校へ頼みますと集まって来る。

このように家庭のほうも子供さんに困ってきた。そして、どうにもならないような事例が私どもの身近に起こってきた。財界の人は財界の人でどうにもならん。ご家庭はご家庭で自分の子供さんに手を焼くという状態が出てまいりました。

戦後教育を見直そう

こうした事態もその峠が少し越えたかなと思ったころに、先程お話したようなとんでもない事件が起こりまして、やっぱり、これは日本の教育がおかしいからではないかという世論が高まり、どうしても戦後教育の見直しをやらなければならぬ、という政治世論になりました。

その時に、私は教育研究所にいたものでございますから、新聞記者たちがたくさん訪ねて来ました。「木田さん、戦後教育って何ですか。戦後教育を見直すというのはどういうことですか」と言うんです。そう尋ねられてみて、戦後教育って何であるかということを、私も初めて考え直してみるようになりました。

戦前の教育と違う戦後教育とは何か。確かに、戦前と違って、尋常高等小学校といったような学校はなくなりまして、六三三というの学校になった。しかし、六三三がけしからんと、こう簡単に言っていいのかどうか。

戦後教育の特色

戦後教育で一番変わったことは何か、といえば教育制度の中では男女共学です。それまでは、女子は帝大に行けなかった。旧制高校にも行けなかったのです。そういう男女不平等は宜しくない。これからの民主社会を築くには、教育は、そこを最初に直す必要がある。両性の平等、今もこの動きはほうはいとして高まっておりまして、男女雇用平等法も最近できました。教育制度は一番先にそこを直したのです。戦後教育が戦前と違うところは何かと言ったら、男女共学を忘れることはできません。

学校制度は六三三制になりました。義務年限が九年になりました。しかし、これを見直すといって、義務年限を六年にするという議論はないわけではないけれども、そういう方向で今の問題が片が付くとは思えない。今は義務教育は九年ですけれども、ほとんど全部の若者が高等学校まで行っている。アメリカは、州によっては義務教育十二年の州がありますけれども、日本の高校進学率ほどその州でも進学率は高くはないんです。途中で可成多数が脱落してしまいます。

日本では、最近、私立の高等学校でしたか、高校生が結婚をしたから退学しろという話がありました。考え様によると、それもちょっとおかしな話なんです。アメリカでは、戦後間もなくのころからそういう問題は終始起こっておりまして、当たり前のことになっておる。しかし、学校では必ずしも簡単ではありませんから、結婚をした子供はもう来なくていいとか、退学結構だということも言っていたりなんかしたんです。しかし今、日本はようやくその段階にやってまいりました。

そうすると、戦後教育というのはどこが変わったのでしょうか。ちょうど森戸先生が大臣で苦労しておられるころ、戦後教育として私どもが教わったことはどういうことだったでしょうか。

これは、アメリカの教育使節団の報告に書いてあることなんです。日本の教育制度とカリキュラムは、大衆と少数の特権階級とに対して別々の型の教育を用意して、一中あるいは広島高校、文理大と行くような子供たちと、それから実業高校、商業高校に行く子供たちとには、小学校の終わりのころから、中学校に行ったら確実にカリキュラムが変わって、そして高度に中央集権化された十九世紀の型に基づく

教育をやっていた。教育の各段階において、各水準において、小学校では小学校なり、中学校では中学校において一定量の知識を教えなければならないというふうに決まっておって、そして生徒の能力や関心の相違を無視して、とにかくこれだけは全部教えるんだという教育をそれぞれの学校でやってきた。いかにして教育制度の中に一定水準を確保するかというのが日本の過去の教育であった。

教育の自由化のすすめ

これはアメリカの教育使節団が指摘した過去の教育の問題点です。そういう一律的な教育はだめなんだ。もう少し子供の能力、適性に応じて教育をしなさい。個人の価値と尊厳を認めるという教育をしなさい。盛んにそう言って改革をすすめたのです。

今はこの戦後教育を見直そうといいながら多くの人がどう言ったかというと、このアメリカの教育使節団と同じことを言っておるわけです。すなわち、画一教育になっているからだめだ、もっと自由化しなさいということを言い出したのです。私はちょっとびっくりいたしました。戦後教育を見直すという人が、戦後アメリカが日本に来て言ったと同じようなことを言っているなというふうに私は思ったのであります。

自由化すれば多様化して画一化しないか、そうじゃないんです。日本は自由化しますと、一生懸命になって入試の競争に競り合いまして、そして入試の試験準備に一定のことを一生懸命頭に入れようとして画一化した教育になってしまう。

ですから、戦後教育が何かは別としても、今の教育には少し困ったことがある。あまりにも画一的になり、みんなにこれだけは頭に入れて覚えろ、そうでないと高校に入れないということになり過ぎていると思うのです。

戦後も同じ

しかし、それが戦後教育であるかと言えば、ちょっとそう簡単には言えない。むしろ、戦前からやってきたことと同じことを戦後もやっていたのではないか。アメリカさんが提唱したことをどの程度やっていたか。それは余り実現していない。アメリカは今になって、日本はみんながこれだけのことは勉強するというふうに一生懸命やって、水準が維持できている。日本のまねをしようと言っている。古

領直後に来て、こういう画一的なことをやっているからだめだと言ったアメリカさんが、今になって、あの一斉の水準をもった日本の教育をまねしよう、向こうでこう言い出しておるわけです。

そうすると、一体こういう状態になって、戦後教育の見直しというのは何だろうか。私は臨時教育審議会にも引っ張られておるわけですけれども、一体そういうことをどう考えたらいいんだろうかな、こう思うようになりました。

どこを見直せばよいか

私は、ご紹介いただきましたように、長く役所でビジネスをやっておりました。子供に教室で教えたことはありません。教えたと言えば、大学生を相手にかれこれ十年前後、気軽な教師稼業の一端をやったことはありますから、大学生との間のことは少しわかるのですが、一体教育って本当に何なんだろうか。何が見直されなければならない教育なんだろうかということを考えてみたいと思うようになったわけであります。

戦後日本は一生懸命になって、教育によって国を興す努力をしてきました。考えてみますと、明治の初めに、村に不学の子なく家に不学の人なからしめんことを期すという大目標を立てたわけですが、その目標が戦後になって実現した。この広島県で最もよく実現した。広島県は高校進学率をとっても全国一である。大学進学率をとっても非常に高い。そういう状態になって、みんなが困っている。この教育ではいけないと言っている。明治の理想が実現した。明治の理想が実現して、みんな困っているというのはどういうことでしょうか。

その困っていることを、臨時教育審議会の第一次答申はこういうふうに言っておるんです。まず、過去の教育、教育の現状について、初等、中等教育の水準は高い。そして、知的水準の高い国民が育成された。大学にも多くの者が行くようになった。過去の教育はこの二言で簡単に評価されております。

しかしと、こう言って、それは記憶力中心であり、創造力に欠け、個性のない同じ型の人間をつくり過ぎている。日本人の自覚が足りない。大学が国際的に評価されていない。制度が硬直化している。受験競争も過熱している。登校拒否、校内暴力、青少年非行等々、教育荒廃がいっぱいである。

これは、両方とも本当ですね。どっちにどのくら

いウエイトを置いてものを考えるかということの違いです。

教育とは何か

ですが、こういう状態になってきたのは一体なぜだろうか。よその人から見れば日本の教育はすばらしい。日本の中で我々が見ておると、困ったことばっかり起こるというのはどういうことか。私は、そこで初めて、自分なりに一体教育というのはどういうことなんだろうかということを考え直すようになりました。

私は、教育学の本をいろいろと読んでみました。そうすると、教育を論ずる人の多くは、人間が生まれて自然に大きくなるというのは、教育の前段階のことで、基本的に教育以前のこととしているのです。自然に体も大きくなり、頭もある程度伸びていくということは当然のこととしておいて、その人間がある価値に向かってどれだけより良い人間になるかというふうにプラスすることが教育であると、こう考えている向きが多い。

確かに、明治以来教育制度の上では、そのように考えられているように見える。学校に来たら、親たちの知らないことを教えてあげます。今までの古い人が勉強してなかったことも教えてあげます。新しい価値を人間に教えていくのが教育である。学校というのは、その新しい知識と新しい価値を一番上手に教えてくれるところだという理解がある。

事実、明治の親たち、それ以前の人たちも、みんな子供を育ててきたわけです。寺小屋もつくって勉強もさせてきた。けれども、ふたを開けて見たら、ヨーロッパの人たちのほうが知識がはるかに進んでいた。ですから、学校というものをつくって、あのヨーロッパの人たちの知識を子供たちに植え付けて早く大きくしよう。体格も、小ちゃな醜い日本人じゃなくて、立派な日本人にしよう。そういうふうにプラスすることが教育だというふうに考えてきたのです。

学校の他に問題はないか

ところが、今問題になっております教育の問題というのを考えてみますと、プラスすることの前に問題がある。子供さんを生んで大きくすること自体に問題があるということが、いろいろと指摘されるようになった。小児科の先生までそれを言うように

なった。

昭和二十年代の後半、三十年代の初めごろは、小児科の先生、保育の先生の言うことを聞いておりますと、母乳を飲ませると頭が悪くなる。頭のいい子をつくるためには哺乳びんで調合した栄養のいいミルクを飲ませなさい。こういうふうに新聞に書いてありました。私はもう子供が大きくなって、ちょっとこれは間に合わんなと思ったのです。

ところが、今小児科の先生はどう言っておるか。そういうことをしたら、だめなんだ。赤ん坊が生まれたら、産褥熱で危ないから、すぐ子供を離すというのではいけません。すぐ母親のそばに置いて、今まで住み慣れた体内の鼓動を早く聞かせるようにしてあげなさい。そして、早く乳房を含ませて下さい。一刻も早く乳房を含ませたほど、お乳の出は二カ月も三カ月も良くなります。子供が成長するというのはどういうことか。お母さんがあやして、お乳を飲ませて、そして声を掛けることによって子供の聴覚が発達します。視覚もそこで広がります。生まれた子供に、二週間目隠しをしたら、永久に視力は生まれません。ですから、生命が体の中に宿ったら、その時から大事にして、親と子がどれだけうまく意思の疎通を交わすかということが大事なんです。と説いておられます。

恐ろしいことに、十数年前は、生まれた子供は独りでに大きくなるから、ベッドの中に寝かせて定期にきちょうめんに、哺乳びんを天井からぶら下げて子供に飲ませておけば大きくなる。こんな感じでした。

教育というのは、そういうように子どもの発育が自然に行われて、学校に来たとき、知恵を入れる、こういうことだと受けとめていたように思える。ところが、どうもその前提がおかしいということになってきた。

変な話ですけれども、こういう見直しもまた、アメリカの人たちから伝わってきた。アメリカも親と子がうまく行かない事例が少なくない。しかし母親のほうが乱暴なんです。日本でも時々、生まれた子供をロッカーの中に入れるというお母さんがいるんですが、アメリカはもっと乱暴なんですね。そういう親にいためられる子供がたくさんいるのです。

どうしてそういうことになったかということを調べていくと、生まれる時、生まれた直後、子供を早く引き離したものほど、親子の関係に問題がある。

母親に母性が育たない。お乳も出ない。子供に対する愛情が母親に湧かない。こういう問題が指摘されてきたのです。

人間の成長発育には、母子密着の時期、反抗期など愛憎併存の時期、親離れ子離れの時期など、それぞれに大切な段階があり、それぞれに上手に対応していくというプロセスが、学校教育以前の課題として大切です。それがむしろ教育のより本質的な側面であります。そこが、狂っているものですから、いろんなことがおかしくなってきた。それが、学校の先生を今日悩ましている要因なのです。

先生は教育の中で何を一番大事に思っているか

全国の教育研究所の人たちが学校の先生にいろんなアンケートを出した中に、こういう調査がありました。

先生方は、子供たちの教育で、どういうことが一番大事だと思っていますか、どういうことを一番子供に与えてやりたいと思っていますかと、十項目ほど尋ねているのです。

そうしたら、小学校の先生の第一は、体力をつけてやること。第二は、慈しみの心を身につけさせること。第三番目は、忍耐心を養うこと。そして、勉強を身につけることというのは、第五番目なんです。

中学校の先生は、第一が同じく体力。第二は頑張り。そして、勉強は四番目です。

高等学校の先生は、これまたびっくりしたことに、第一が体力。第二は頑張り。第三番目に学力。

学校の先生方がこのように考えているとすると、学校は保育に力を入れていることになる。学校が学力をつけることに手がまわりかねているという状態に置かれていると言えましょう。

先程私がお話したように、中学校の先生が教室に入って自分の授業をしようというのに、まずその前に、聞く姿勢にするのに時間の半分をかける、これは保育です。人のお話を聞きなさいということができなくなりつつある。困った状態です。

かつての学校というのは、こんなことは考えたことがなかったと思います。学校に来たら、子供は先生の言うことをよく聞く。先生が教える知識にも一生懸命聞き耳を立ててくれる。今日はそうはならない。テレビのほうが面白いことを話しいろいろのことを教えてくれる。先生はあんなことしか言ってく

れない。こういうふうにひっくり返ってきておるわけです。

要するに、学校は同じであるつもりで一生懸命教育をしているのですけれども、いつの間にか、家庭環境が変わってしまった。社会環境も変わってしまった。そのために、学校の置かれた位置付けが、社会の中から見ると変わってしまった。子供が育っているのは、社会の中であり、家庭の中で育っているのです。その基盤が変わってしまった。学校だけ同じようなつもりでやってみても、同じようにいかなくなってきている。ここに、今起こっている諸々の問題の根本があります。

放送大学の話

この間、おもしろいことがありました。実は、放送大学の教育番組についてです。放送大学の実現は昭和四十年から一生懸命に考えられてきたことなのです。やっと実現できるようになって、どういう番組をつくったらいいか、いろいろの工夫が行われました。今、東京地区でしか見れないので残念なんですけれども、なかなかいい番組が出ているんです。

私は、二十年前にアメリカの放送教育を見に行き、放送大学は、教室の自然の状態をそのまま実況中継すればよろしい、と思って帰りました。そうしたら生徒は聞くものだと、こう思っておったんです。ところが実際に放送番組を作るとなると、なかなかそうはいきません。プロデューサーは、そんなことをやったらだれも見る人はいませんよと言う。

それでは実際にテストしてみましょうということになって、東大の宗教学の先生が都内の私立の女子大学で行っている講義を六通りに製作して、それを研究集会に提示した。

どういうのかというと、第一は、生徒のいすに一台、カメラを据え付けて、生徒が座っていると同じようにして、一時間、先生の講義を映す。

二番目は、カメラを三台教室に入れて、実況中継をする。

三番目は、スタジオで、先生が一生懸命講義をし、図等を用いて説明する。天国と地獄という主題なんです。それをスタジオで実演する。

四番目は、鎌倉のお寺へ先生が修学旅行に行くわけです。そして、地蔵さんの頭をなでたり、お寺の和尚と話をしたりして、天国と地獄というのを今の人、昔の人がどういうふうに考えたかという話をする。

五番目は、先生のノートをプロデューサーが読み、ドキュメンタリー風に編集し直して、番組を作り、そのフィルムを見ながら教授が説明をする。

六番目は、先生のノートをプロデューサーが全部ドキュメンタリーにプロデュースする。そして声のきれいな上手なアナウンサーが解説をする。

その六本の番組をつくりまして大学生に見せて、そしておもしろかったか、わかったか、もっと勉強しようと思ったか等という簡単な項目なんですけれども、五つ、六つの項目に評点を入れさせたわけです。

反応の仕方が違う最近の学生

私どもの集会の参加者にも、その六本の番組のサワリが提示されました。大体集まっていたのはその多くが大学の先生なんですが、こういう六本の番組のうち、どういう番組が放送大学の番組としていいかと言って、そのアンケートがとられた。

そうしたら、先生のほうはやっぱり教師がスタジオで講義をしているのが一番いいと言う。教室の実況中継は間延びしていてだめだ。おもしろくない。あんなのじゃすぐ飽きがきて横を向いちゃう。

ところが、何と驚いたことに、学生の反応は私が説明した最後のものが圧倒的に良く後のものほどいいんです。教室にカメラ一台置いておいて先生の講義をそのまま映しているのは全く評価が悪い。

私はこれを見てびっくりしました。どうしてこんなことになるのか不思議でした。実は、二十年前にアメリカに行って、いろいろと放送教育を行っている大学に聞いたのです。どういう番組に学生の評判がいいかと尋ねたら、アメリカのテレビラジオ学科の助教授が「いろんな先生の番組を撮りながらつくった番組は、木田さん、だめです。できるだけ単純な、シンプルなものがようございます」と答えてくれました。事実、アメリカの大学の放送講義には普通の講義そのままのものが多い。そのままでも、実験はよくわかるし、画面もよく映る。大講義室の講義などより放送番組の講義の方がよく見え、よく聞える。私もそれでいいのだと思ったのです。

私は、テレビの番組では実況中継が一番いいんです。もう年をとってきたせいもありますけれども、ドラマみたいなものは面倒くさい。むしろ実況中継で、相撲、プロ野球、そして国会のあの実況中継も

ばかばかしいことがよく映りますが、それなりに面白い。お芝居はちょっと気は引かれますけれども、次から次へと万華鏡のように場面ばかり変るテレビの番組はやり切れない。私はそう思っていたのです。

ところが、今の若い学生諸君はどうか。全然違うんです。どうしてこんなことになったのかと、考えてみますと、我々が学生の時代にはテレビもラジオもなかったのです。ラジオというのは空襲警報だけなんです。ですから、勉強といったら人の話をじっと聞くか、本を読んでいる以外になかったのです。そういう中で成長しましたから、チャカチャカといろんなドラマが出てきたら、もう煩わしくて仕様がない。

ところが、今の学生たちは生まれた時からテレビ漬けです。ラジオ漬けです。お母さん方がテレビ、ラジオをつけっぱなしにしているものですから。ですから勉強するときにも、それが付いていないと勉強にならんという者も出る。そして、そういう子供たちが勉強したいと思うのは、どういう中身かと言えば、中身が間伸びしてはいけない。色々と気を惹くような濃い中味がとりどりに入っているものに慣れている。我々は濃いものだったらやり切れない。淡白でないと。それほどやっぱり育ちが違っているのです。情報化時代ですね。テレビ漬けの時代なのです。

そういうふうに、すっかり回りが変わっているときに、学校の先生は変わっていない。ここにいろんな変化が起こるんです。行き違いが起こるんです。みんな大まじめで、一生懸命やっているんですけれども、ずれている。

もう時間がなくなりましたので、本当はどうもまだ序の口なんですけれども、後もっと私以上におもしろい岡先生のお話がありますので、そこで大急ぎで結論を申し上げます。

子供は親をみて育つ

私は、教育というのはこう考えています。人は人の子だ。だから人は人によって育てられないと、人にならない。狼に育てられたら狼でしかない。ですから、小さいときにできるだけ愛情を注いで、親の愛というのがわかり、友だちの愛情がわかるようにして育てないと、愛情のわからない、人間らしからぬ人間になる。今、それがだんだん多くなってきていると思うのです。ですから、人は人の子であると

いうことをもっとみんな見直して、実行しなければならない。

親は自分の言葉だけでは子どもの教育はできないのです。私も自分の子供のことを考えますと、言葉で言ったようには子供は大きくなっていない。「己がまね、するなと親は子に意見」という川柳があります。親は子に俺のようになるんじゃないぞと言っているわけです。しかし、その親の言うことは聞かないで、親のするようにするのが子どもです。人は人の子である。これが教育の一番大事な基本原則です。

環境が人を作る

二番目に、もう一つ大事なことは、人は環境の子であるということです。この環境というのは、いろんな環境をすべて含めて考えています。

まず、自然環境があります。私どもはこのアジアの島国にありますからこういう顔つきをし、こういう髪の毛をし、南方へ行けばもっと色が黒くなる。北へ行けばエスキモーのように白くなる。食べ物からみんな違う。そういう自然環境から始まりまして、私どもは日本語という文化環境で育っておるわけです。日本語以外に考えられない。ですから、英語で考える人とは違う。発想が違う。行動の様式が違う。

宗教もそうです。アラブの人たちというのはどうしてあんなことになるのか。アラーの神様というのはどうしてあんなことになるのか。学校では先生が教えたからアラーの神様がその人の神様になったわけではないですね。宗教もそういう我々の環境をつくり、我々がその中で大きくなっていくんです。

その環境は職場もそうです。銀行員は銀行員のように。学校の先生は学校の先生のように。広島の安芸の人は安芸の人のように。日本人の中で広島県人というのは恵まれた県民性をもっていると言われます。気分もやさしいし、その気候のようにすばらしい、そういう人間性をもっておるわけです。ですから、こういうことは教育にとって大変大事です。

そして、最も直接の環境としては、家庭環境によって人間がつくられているということを考えなければいけません。教育というのは家庭環境のつくり出すものでありまして、親が口で言ったことが家庭教育ではない。

環境を見直そう

こう考えてくると、環境というのはどうにもならないものではないということがおわかりでしょう。家庭環境をつくったのはだれか。それは一人と一人の人間です。好きになって結婚をして、子供ができて、子供と一緒に家庭をつくっている。そのつくった家庭環境が、「ああ、おふくろの味が一番おいしい」という人間を育て、そういう人たちのものの考え方がいつの間にか行動様式として身についていく人間になる。ですから、教育を直そうと思ったら環境を直す以外にないのです。

環境は、自然環境だって人間がつくっています。今のようにマンションをつくりマンションの中に入っておると、子供がすぐ骨折をするというようなことになる。困ったことですけれども、そういう自然環境、一年中冷暖房の効いた調子のいい環境につくっておけば、ちょっと外に出せば子供が風邪を引くというふうになります。そういう環境を人間がつくっていて、人間のつくった環境によって人間がまたつくられている。これが教育の姿です。

ですから、一対一の人は人の子であるということと同時に、人は環境の子である。大きな環境の中のある一つの領域が学校です。学校だけを変えようと思ってもなかなか難しい。学校は殊の外変わっていないから困る。学校の先生方も、もしここにいらっしゃるとすれば、世の中がどういうふうに変わって、子供がどう変わって、どう対応しなければならんかということを本当に考えてもらわなければいけません。学校の先生も、先程のように、教える前に体力をつけることに一生懸命ですなどというように変わってきているのですが、それではちょっと寂しいです。もう少し違ったことを学校がやらなければなりません。みんなで考え直してもらいたいのです。

皆んなで考えよう

こう考えますと、教育改革というのは、だれかが何かをすれば変るというものではないのです。親も、先生も、職場も、職域も、地域も、みんながそれぞれに、その教育に及ぼす影響のあるもの、環境をつくり変える努力をする、そういうことがなければ教育改革はできない。

今、大きな社会変革が起こっています。その大きな社会の流れというものをみんながよく考えながら、人間の本当に生きる意味というのは何かを考えて頂きたい。大会社に勤めることだけが生きる意味では

ないでしょう。本当に生きる意味というのは、親切な、そして頑張ることのできる人間、自分であることができる一本立ちのできる人間になること、世界のどこに行っても自分一人で生きていける人間になることではないでしょうか。本当に生きていけるというのはどういうことか、このことを考えながら、変化していく社会の中で、教育が何をしなければならないかを各人が考えていく必要があるだろうと、こう思うのでございます。

私の予定した時間以上の時間をとってしまいました。皆さん、熱心にご静聴いただきまして本当にありがとうございました。心からお礼を申して私の話を終わります。（拍手）